

10年目を迎えた『ライフデザイン白書』

第一生命経済研究所 代表取締役社長
石嶺 幸男

当研究所は、今般『ライフデザイン白書 2006-07 ~ 景気回復がもたらしたライフデザインの変化 ~』を発売した。本白書は、人々の生活行動や生活意識の中から、「人々はどのようなライフデザインを描いているのか」、そして「どのように描いていくべきなのか」を汲み取り、ライフデザインの“今”と“これから”を一人ひとりが見つめ直すきっかけと材料を提供していくことを目的に、2年ごとに出版している。

今回の白書は、調査開始からちょうど10年の節目にあたる。バブル経済崩壊後の10数年はわが国にとってとても厳しい時代であり、それとともに人々の将来への不安も高まってきた。2003年に発売した前回の『ライフデザイン白書 2004-05』では、依然として低迷していた日本経済の影響によって、就労状況や雇用環境は悪化し、人々は失業や給与の低下におびえ、生活設計をする余裕もなかった。また、その影響は消費生活にも現れ、人々の経済的ゆとりや時間的ゆとりはともに低い状況にあった。

しかしながら、ここに来てようやく日本経済には明るさが見えてきた。本白書はこうした社会経済の変化を受け、人々の生活不安は和らいだのか、人々はどのようなライフデザインを考えるようになってきたのか、といった疑問に答える内容となっており、概要は下記のとおりである。

今回の特集では、“未婚・晩婚化が進む若者たちのライフスタイル”と称し、「シングル・ライフ」を取り上げている。昨今ニートやフリーター、パラサイトシングルなどの増加が社会的問題となっているが、これらを含む現代の若者たちは、何を考え、どのような生活を送り、どのようなライフデザインを描いているのか、を明らかにしている。次に、白書編では

- (1) 【家族】… 男性の雇用不安や女性の社会進出、少子高齢化の進行など、家族を取り巻く社会環境はこの10年で大きく変化した。にもかかわらず、家事分担や性別役割分業意識など、家族関係はほとんど変わっていない。さらに、経

済的負担や治安の悪化、仕事との両立の困難さなどのために、現代社会における子育てのしにくさが浮かび上がった。

- (2) 【安全・安心・コミュニティ】… 人々の災害や犯罪に対する不安感が高まっており、こうした災害や犯罪から身を守るためには、地域コミュニティの働きが欠かせない。しかし、現実には、近所付き合いを密にしたり、地域の防災や防犯活動に参加したりしている人は少数である。
- (3) 【消費生活】… 人々の経済的ゆとり感は、1995 年以来低下し続けてきたが、ここにきてわずかながら上昇に転じた。しかし、それが消費に結び付くにはまだ時間がかかりそうである。また、携帯電話やパソコンなどの情報機器の普及が進んでいるが、その背景には、それらを利用できる人とできない人の間に生じる格差が依然として存在している。
- (4) 【就労意識・実態】… 男性は30代と40代で長時間労働化が進んでおり、女性は30代で就労率が伸びている。このことは、男性は仕事が忙しいために家庭を顧みる余裕がなく、女性は結婚や出産を先延ばしにして就労を続けていることを表している。また、職場における仕事と家庭の両立支援制度については、まだ普及はしておらず、働きながら子育てをすることの困難さがうかがえる。
- (5) 【体と心の健康】… 肉体的、そして精神的にも、健康状態が良くない人は多い。特に、子育て期にある30代から40代は肉体的にも疲労している上に、精神的ゆとりが少なく、家庭や職場における人間関係や負担の大きさにストレスを感じるなど、多くの人が悩んでいる。
- (6) 【生活リスク・マネジメントとライフスタイル】… 失業や給与の低下に対する不安感は減少し、人生設計ができている割合は高まった。人々の生活価値観は、「競争志向」は低下傾向にあり、「経済的豊かさ」よりも「心の豊かさ」を重視する方向に移りつつある。人々は“スローライフ”を求め始めている。

人々のライフデザインは、経済環境に大きく左右される。経済の回復が続けば、個人の雇用と収入は安定し、経済的ゆとりが生まれ、好きな消費活動をし、人生設計も立てやすくなる。近年、企業の経済活動は回復基調にあるとはいえ、厳しい国際競争の中でいつまでこの好況が続くか、という問題もある。また、人口減少や社会保障制度の崩壊により、人々がライフデザインをしにくくなる時代が再び来る可能性もある。

人々がライフデザインを行いやすくなる状況が今後も続くか、それとも再び行いにくくなる時代が到来するのか、いまはその分岐点にあるのではないか。